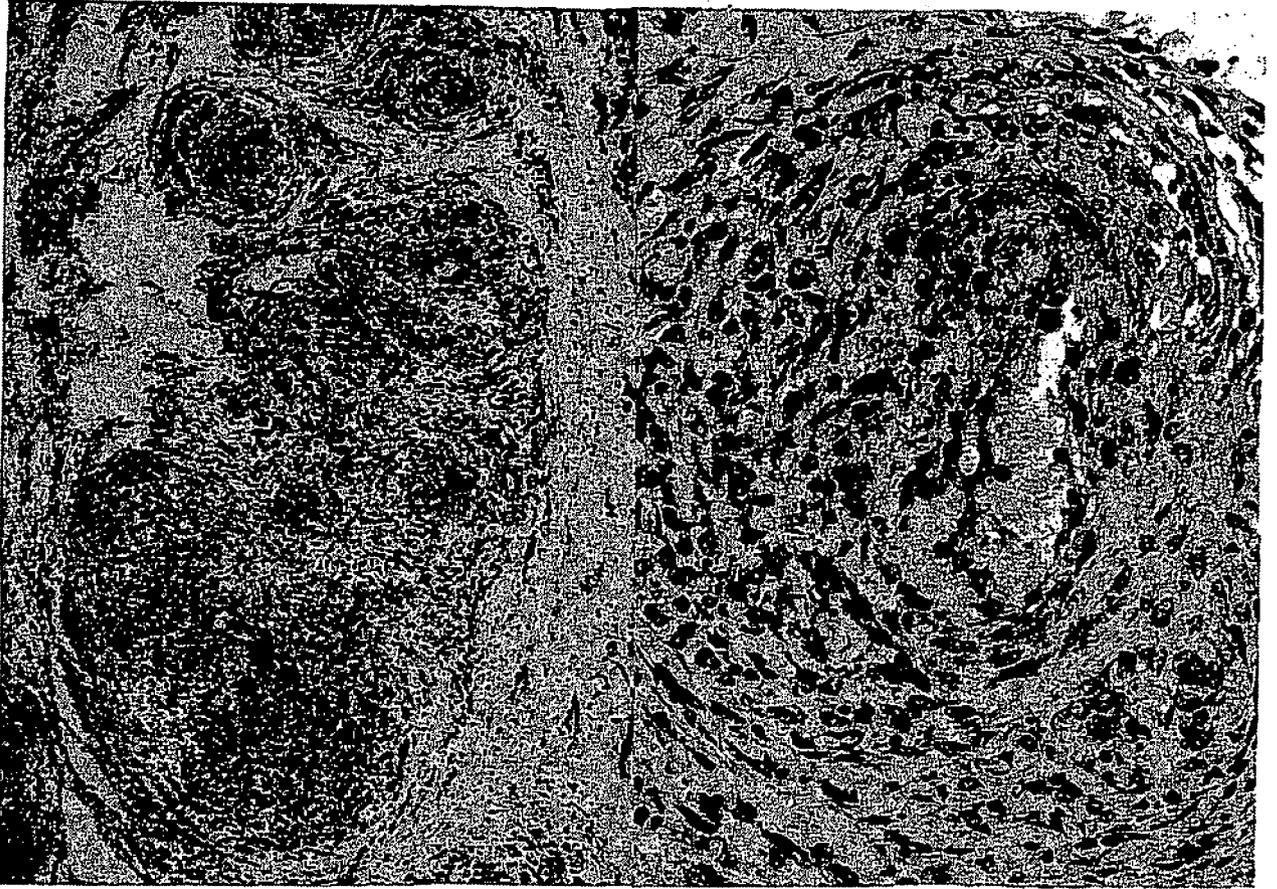


和牛の結節性汎動脈炎

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題

第11回獣医病理研修会標本 No.162



材料は、牛、黒毛和種、雌、5才で、1970年8月、広島市食肉衛生検査所で、廃用屠殺されたものである。

組織病変と関連あると思われる臨床症状は、約1年前から気付かれた。すなわち、体表に丘疹が認められ、食欲やや不良、栄養不良であった。殺1カ月前からは、さらに、鼻出血を呈し、後脛踰限となって倒れる症状を示し始め、四肢の浮腫、心悸亢進、心音混濁および結滞なども示して悪化の一途をたどり、ついに廃用とされた。

解体時、肝、腎、心、骨格筋に、無数の米粒大前後の白斑が認められた。

組織検索は、肝、腎、心について行なった。その結果、表題の病変が、それら検索組織の間質組織に多発していた。すなわち、ほとんどの中～小動脈が、病変化していた。病変は、ここに掲載した附図で代表されるので、それを中心に記述する。

附図1は、心外膜下組織 (H.E., $\times 53$) で、動脈を中心として、線維芽細胞増殖巣が多発している。その増殖性変化は、血管壁の著明な肥厚を招き、さらに、その周辺組織に及んでいる。一部の血管では、腔が狭窄あるいは閉塞されている。なお、増幅した血管壁には、所により、好酸球あるいは少数の好中球浸潤を認める。これら増殖性変化を示す血管の周囲組織には、形質細胞、リンパ球浸潤が屢々観察される。附図2は、腎門部の1動脈

(H.E., $\times 268$) を示す。血管壁は、高度の線維芽細胞増殖によって置換され(右下側の壁にやや健全な部あり)、その増殖は、周囲組織に及んでいる。この増殖組織中に、少数の好中球が散見される。血管内皮細胞は、腫大、剥離、消失を示す。以上示した附図以外に、血管壁に、屢々出血があり、また、線維索の析出、水腫性膨化が、まれに所見された。また、中膜の良く発達した中等大動脈では、内膜と、外膜に増殖性変化が目立ち、中膜は、大部分健全であった。しかし、時には、局所的に、中膜を含めた壁の全層が冒されている場合も認められた。

以上の所見は、文献および成書に記載されている結節性汎動脈炎の定型像である。この組織病変については、一般に、3～4の病変期があるものとされている。例えば、ARKINは、変性期、急性炎症期、肉芽組織期、治癒瘢痕期に区別している。本例を、検索した範囲内で眺めると、肉芽組織形成期に該当する所見が圧倒的であった。

本病は、人・獣医界を通じ、散発的に発生するまれな病とされている。従って、組織だった研究は乏しく、いずれも、症例報告の域にとどまっている。原因に関しては、アレルギー説が唱えられ、最近では、膠原病性格を帯びた疾患とされ、免疫病理学的にも注目される興味深い病である。